

苦手さを知ること その2

渋谷 純子

長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

キーワード：時計の学習 計算 音読 生活面との関わり

成田会・研究ジャーナル6巻で時計の学習や計算、音読などの苦手さや身についた工夫などについて研究ノートとしてまとめた。今回はその第2弾として、時計や数概念、視知覚認知の苦手さが学習以外の生活に関わっている部分や工夫などについてまとめてみようと思う。

前巻でも述べたが、時間に関して「何分前・何分後」がイメージしにくく、「20分後に集合」などのやりとりでは、まず頭の中でアナログ時計をイメージし『20分後は20分経ったらの話だな』と整理をして理解している。プリントで時計問題を解く場合であればこれで解決するが、生活の中ではその20分間に取り組むことや移動などの段取りを組んで行動する必要が生まれる。ここで、数概念のイメージのしにくさの影響を受ける。計算だけではあれば、今の時刻に20を足すだけだ。

しかし、私にとって数字は数字でしかない。

『20分』を数量として捉えるために、アナログ時計のイメージが必要なのである。針の動く量で時間の量がイメージできる。『20分は数字4こ分』、『着替えに5分かかる』ではなく『針が数字1つ動く間にできる』といった各活動に必要な針の動く量で何ができるか、間に合う/間に合わないなどを判断している。現在の地域支援の仕事では、毎日異なる自治体や施設を異なる時間に訪問しているため、各移動時間を『大町市なら時計1周半（1

時間半）、安曇野市なら半分と数字3つ分（45分）、松本市なら数字4つ分（20分）くらい』といった形で整理し、出発時刻を判断している。身支度などの時間もそれぞれ数字何個分となっている。デジタル時計は今の時刻を知るにはとても便利だが、時間を活用する場面ではアナログ時計のお世話になっている。ちなみに、時計だけでなく日にちに関する数量概念も持ちにくいので、1か月が表になったカレンダーも必須である。

これも時計の学習に合わせて小学校の担任から教わった工夫のひとつである。注意転導や不注意も影響していたと思われるが、家族によると時間配分の感覚が身に付かなかったようだ。口頭で時間を伝える、やるべきことを視覚化（スケジュール提示）する、時間を守る意義を説明するなど様々な工夫の中で、担任の先生がアナログ時計を5分間隔のピザ型に分けたブロックで各活動に必要なパーツ数を検討し、何をいつやると間に合うのかを実体験を含めて整理してもらって、やっと身に付いたとのことである。時計学習の大変さは覚えていたが、時間配分の指導については全く覚えておらず方法だけが身についていたため、今回この話題をまとめることで担任の先生のおかげということが分かり、さらに感謝の念でいっぱいになった。

次に、視知覚認知の苦手さについて、板書や音

読の不便さを前巻で紹介した。学生時代にはそれに加えて体育や音楽にも影響があった。走ったり泳いだりすることはそれなりにできていたが、球技が壊滅的な状態であった。バレーやサッカーなど手足を使うもの、卓球やテニス、バトミントンなど器具を使うもの、どれをやってもボールに当たらない、当たったとしてもうまく飛ばない、取れないなどの状態で、周囲からの評価も『ふざけている』『ちゃんとやりなさい』と叱責を受けるレベルではなく、『人間、向き不向きがあるから』と温かく見守られるほど壊滅的であった。音楽では、いつまでも譜面がパツと読めない、見失うといったことが頻発し、小学6年生までエレクトーンを習っていたが最後まで音符にドレミのフリガナをふり、暗譜に頼るという力技で取り組んでいた。当時は運動神経の悪さや音楽センスのなさなどで納得していたが、ビジョントレーニングの講習を受け、視知覚認知の苦手さが少しは影響していたのかなと感じた。視知覚認知に問題がなくても趣味や生計を立てるほどの興味は向いてなかったため、『下手だったけど楽しかった』という良い思い出になっている。

ここで、視るプロセスを簡単に整理しておこう。視るプロセスには3つの眼球運動がある。1つ目は追従性眼球運動である。動いているものを追視したり、文字や線などを目でなめらかに追いかけたり、見たいものに合わせて正確に目だけを動かす力である。これができないと、途中で対象物を見失うことになる。2つ目は跳躍性眼球運動である。ある1点から1点へ視線をジャンプさせる眼球運動で、すばやく眼を動かして対象物を捉える力である。これができないと、身の回りにあふれている多くの物の中から早く正確に必要な資格情報を得ることができなくなる。3つ目は両眼のチームワークである。近くや遠くを見るとき両目のチームワークの力で、これができないと距離感や立体感がつかみにくくなる。

板書や音読、体育、音楽の出来事は社会人生活への影響は少ないが、視知覚認知の苦手さで一番影響を感じているのが車の運転である。上記の3つの眼球運動が大きくかかわっており、個人の不便さではなく、人命に関わる可能性のある不便さで笑い事ではない事態になる。幸いなことに今のところ無事故で過ごしている。視知覚認知の苦手さが分かる前から運動神経の悪さや板書や譜面など色々見失う経験を踏まえて、一病息災よろしく基本的には運転しやすい道路を中心に無理をしない運転を心がけてきたことが無事故につながっているのではないかと思う。しかし、慣れない道や看板など背景がゴチャゴチャしている道では信号や標識などを見落としそうになったり、一瞬とはいえナビ画面と前方を視線が行ったり来たりして状況把握が遅れるなどヒヤリとする場面がある。視知覚認知の苦手さという自覚に加えてナビの音声案内の丁寧さ、安全装置、車両の幅などの検知システムといった技術の進歩でかなり助かっている部分は多いものの、これからも慢心することなく安全運転を心がけていこうと思う。

運転ほど重大な不便さではないが、人や物を見つけることも苦手である。混雑した中での待ち合わせでは相当気合を入れて見渡していると気づけたり、気合を入れていても気づけなかったり、気を抜いていれば気づけることは稀で、近くで声をかけられて驚くことが多い。待ち合わせであれば「気づかなかった」と謝ることもできるが、知り合いとすれ違って無視されたと誤解されることもある。また、巡回訪問などでよくあるのだが、ある程度離れた位置から「あの子です」「三つ編みの子です」「黄色い服の子です」など指差しや手差しなどと一緒に対象児を教えてもらうことがあるが、動いている複数の子どもの中から負担なく見つけれられるのは5、6人の集団くらいまでで、それ以上になると見つけ出すまでに時間がかかる。さらに、資料に特徴をメモするために目を離すと、再

度見つけ出すまでに時間がかかるという非常に効率の悪い事態になる。一人で訪問した場合は、以前は内面はあたふたしているが見失ったことをできるだけ表に出さずにこやかに観察している風を装っていたが、最近は「たくさんいて・みんな動いていて」など見つけにくい理由を伝え、実際に対象児のところまで行って自然に頭や肩を触って教えていただけることが増えた。また、同行者がいる場合は、視知覚認知の苦手さを伝えてあるのでその都度頼りにして教えてもらえるので、大変ありがたい。

視知覚認知の苦手さについて、生活の中で感じている不便さをいくつか紹介した。『幼少期から周囲のお膳立て（工夫）で成功体験を積む→苦手さや工夫の自覚を育てる→自分で工夫できるようになる』という理想的なステップが、ある程度実現できて今が在ると感じている。お膳立て（工夫）と表したが、苦手さと工夫など自覚につながらず、知らないうちにうまくいったという成功体験だけではお膳立てのままになり、お膳立てしてくれる人がいなくなると困ってしまう状態になりやすいと感じている。

これからも、まだ知らない得意な面や苦手な面に気づいたり指摘されたりすることがあるだろう。自分はこうだからと決めつけず、それぞれを自覚し、工夫したり相手を頼ったりして少し不便さを解消する、うまくいかないことを受け入れたり楽しむなど続けていきたいと思う。

文献

1 北出勝也,発達気になる子の学習・運動が楽しくなるビジョントレーニング,ナツメ社,
2015,P16-34